

こころのなかからうつくしく

講師：武庫川女子大学文学部 にしもと 西本 のぞむ 望 教授

プロフィール



西宮市で育ち、現在は武庫川女子大学文学部教授として、「こども学特論」「家庭支援論」などの講義を担当。また、短期大学部、大学院研究科修士課程指導教授、大学院臨床教育学研究科博士課程指導教授を兼務。静かで、やさしい口調のなかに、ウィットとジョークでグッと引きこむ話術、スツと心に沁みこむ講義に人気がある。

主な公職歴

- ・西宮市家庭教育振興市民会議委員
- ・西宮市旅館業等審査委員
- ・日本保育学会評議員
- ・日本乳幼児教育学会理事

西宮市PTA協議会と西宮市教育委員会は、平成24年2月3日に中央公民館で、「こどもの見えない学力(こころの習慣)、日常生活の基本的・社会的な習慣をしつけるには」をテーマに子育て講演会を開催しました。

「見えない学力」を身につける

「見えない学力」とは、一般に言う教科的な学習の評価を示すものとは異なり、「こころの習慣」、つまり家庭生活での基本的な生活習慣や社会的な生活習慣となる倫理規範(しつけ)をさします。見えない学力はどのように身につければよいのでしょうか?親は、どのようにしつけをすればよいのでしょうか?

単に親の言うことを聞くこどもが、必ずしも望ましいわけではありません。こどもは、親の言いなりににはならないのです。また言いなりにしてもいけません。ときには道を逸れることがあるかもしれません。親と理解しあって、かか

わり合えるのが望ましいのです。つまり親からの溺愛や干渉の対象になるのではなく、将来には横に並ぶ対等な関係としてみなしてください。

1. こどもの育ちから特徴をとらえる

こどもの日常生活のささいな言動から、こどもの課題を発見することが重要になります。それはこどもの望ましい成長・発達のために、適切な保育・教育を実施するための事前評価になるのです。そのことがこどもの成長・発達にとってのターニングポイント(分岐点)になるわけです。

次にこどもの成長・発達の年齢段階と種々の

症状等について例を示します。

(1) 出生時～3歳頃

愛着性の形成が行われる時期です。これはこどもが積極的に、適切な応対をする特定の人物と愛着関係を結びつこうとするものです。親子の絆(親子関係の成立)に結びつくのです。安定的な愛着性ができることによってエリクソンのいう「基本的信頼感の獲得」が生まれるのです。

(2) 3歳頃～6歳頃

親への強い愛着性が弱まり、他者に対して愛着が向けられるようになります。これによって仲間関係の形成が行われます。さらにこの時期には、こどもは食事、睡眠、排泄、着脱衣、清潔といった身の行動を自らしようとする自律から、他者から独立した自立的な行動を行うようになります。すなわち基本的な生活習慣の形成(中学校教育までの課題)です。

(3) 6歳頃～9歳頃

小学校1、2年生は、身近な事柄から学習する教科的知識内容の修得が始まる具体的思考の時期で、比較的学習行為はうまくいきます。しかし3、4年生以上になる9歳頃～12歳頃になると、具体的思考に加え抽象的思考をしなければならなくなってきました。抽象的思考とは、目で見たり、耳で聴いただけでは理解しにくいもので、自身で物事の考えや性質などをとらえたり、イメージすることです。例えば「平和」はそれにかかわる思考を要する言葉になります。この過程で具体的思考から抽象的思考にうまく移行できない場合があります。その状態を9歳の壁と言います。

2. 基本的な生活習慣を身につける

基本的な生活習慣形成の目的に、①社会集団の成員として行動様式を習得し、他者との関係を円滑に行っていくこと、②自律的な意思をもって、個人として自立的行動を行うこと、③身体内部を整える生活のために、いわゆる健康を保ち、心身の調和的な成長・発達を遂げていくこと、があります。近年「早寝、早起き、朝ごはん運動」や「おはよう(挨拶)運動」が、しばしば実施されています。

○ 箸の持ち方

食生活の変化で箸を使用する機会が以前より減少したり、伝統的文化の継承を担う高齢者と同居しないことで、こどもにとっては見本となるモデルが不在となっています。それによって、こどもは箸の使用方法を学ぶ機会や異なった用い方を糺される機会を失ったのです。現代では、祖父母世代による孫世代への伝達が困難になっています。

○ 睡眠

添い寝の要・不要についても定説はありません。添い寝は親子の安定性愛着や信頼関係を形成する有効な手段です。最近では、添い寝や親子同室で寝ることが、こどもの精神安定の維持や急病を発見しやすいなどの利点が見いだされています。

○ おねしょ

寝ている時に起こすと、それによって夜間での排尿習慣が形成され、却って夜尿症(おねしょ)から脱却できない危険性をもつ指摘があります。夜尿症は叱らないで、少しでもできた(失敗したことを言えた)ことをほめるしつけをしてください。つまり早い時期にできるのが良いというわけではありません。こどもの望ましいパーソナリティ形成のため

には親が時間をかけて耐える必要もあります。

○ しつけ手

現代は、母親が主に家庭で子育てを担っているといわれています。ここ近年父親も子育てに参加する（略称：イクメン）傾向にあり「母と子だけの煮詰まる関係」には改善がみられているようです。しかしながら、子育てにかかわりたい父親たちは、厳しい経済状況の下で長時間労働を強いられていますので、育児に加われない事情があります。かつては、地域には親族・地縁で結ばれた人びとが居住していて、子どもにかかわるのは親だけでなく、祖父母、おじ・おば、がいたのです。今では、かかわってくれるいわゆる地域の親がいないのです。親は、その人たちにかかわってもらいたいと希望はするのですが、一方で各家庭は、私的空間を守ることを維持しようとしません。また他者からの介入を避けず、他者への干渉をしないことが現代の価値観になってしまっているのです。

イクメンで注意してほしいのは、家庭に2人の母親が出現し、2人の親が同じ態度をとってしまうと、子どもは逃げ場所がなくなってしまいます。しかも逃げ場所となる祖父母や地域の親も近くにはいないのです。

3. 社会生活での規範行動と課題

家庭は、子どもにとって、①親に対する態度と社会的スキルの訓練、②他者関係・仲間関係（お友達とのかかわり）の構築、③公共マナー（公衆道徳）を獲得する、第一歩の場とされています。

○ 増加傾向のある子育て（養育）態度

現代増加しつつある子育ての態度には、親が子を一方的に甘やかす、親が子に服従して

しまう傾向があります。日本独特の甘えの構造とも一緒になって、子どもが「小皇帝」となってしまうたり、家庭内暴力を起こしてしまったりすることがあり得るのです。さらに近年、学校園を悩ます「モンスター・ペアレント」は、この親たちのことをさすのです。子どもの家来である親たちは、子どもにとって不都合な障壁があるとそれを払いのけるのです。その攻撃の対象は教師などです。

一方で、無視、拒否、残酷の意識・態度による子育ても増加しているようです。これらが極端になりますと、子どもへの虐待（心理的・身体的、ネグレクト）につながる危険性があります。母親の意識が「いつもイライラして余裕がない」、他人の子と比較して「自分の子は〇〇ができない」と否定的になり、子育てに行き詰ってしまうのです。母親としての思い、父親の思い、祖父母たちの思い、はそれぞれあるのですが、子どもは親の都合のよいようにいかないのです。

4. 公共マナーを身につける

まずは家庭での基本的な生活習慣の実行から始めていくとよいでしょう。幼児期からの習慣形成の過程を経ることによって、他者の世話にならない、迷惑がかからないようにすることができます。失敗しないための方策の一つは、出かける前には、約束ごとの声をかけることです。家庭外では、事前に約束ごとを伝え、それを守ることを言うておきます。帰宅した時にできたことをほめると、なお効果が上がります。一貫性を保つことも必要です。時間帯や場所の違いがあっても通常では同様の行動をすること、言動を必ず一致しておくことがルールを守る基本になります。意図せず親が模範を行っているこ

とも効果はあります。たとえば、逆効果の例としては、ごみを捨てないように、と子どもには言っておきながら親がごみを捨てると効果は全くありません。家庭外に出ると契約（約束ごと）が重要となることを伝えることもよいでしょう。家庭内では、のびのび、甘えが許されるようにしておくのもかまいません。ただし説明をしておく必要があります。家庭外では、契約ではありませんが、他者に迷惑をかけないことのほかにも、社会的弱者を援助することを伝えるとよいでしょう。家庭教育実践目標にもありますように「育てよう 優しい心と がんばる力」に結びつきます。知識のなさによる偏見が生じるのを防ぐことにもなります。

ここで一般によく「ふつう」「まとも」「常識」を口にする人々がたくさんいることに注意を喚起しなければなりません。つまり**固定的な価値観が危ない**のです。特に危険なのは、自己の身近な意見の合う人物だけをみて常識としてしまうことです。それぞれの人に、それぞれ特性があることを認め合うようにしなければなりません。

5. 親として自覚しておくこと

正しい内容を選択することが必要なので、幅広い知識を有することが必要となります。ただしそれをひけらかさないことも他者関係の維持や自己の自覚のためには必要です。

また自分に不都合な話を聴いて、自己評価と改善を図ることも重要です。自分と仲良しグループだけの価値観をもちこまないことです。した

がって、**よその子を叱ってもいいような親同士**の**関係を作っておくことが必要**です。互いの価値観は尊重することは必要ではありますが、真の友やそのこどもには、叱ることもできます。もちろん御自身もまた自分のこどもも叱ってもらいましょう。かつてのように地域全体での子育てには至らなくてもママ友の仲間と協働で子育てするのは理想的です。家庭教育実践目標「見守ろう よその子 我が子 区別なく」にもつながるのです。

学校園などの教師や保育士に要求し過ぎてはいけません。家庭で解決できることは行って、家庭だけで解決できない場合は教師や専門家に相談するとよいでしょう。

以上より、しつけの観点としては次のようなことが挙げられます。**ポチポチ始めましょう**。しかも**忍耐強く**。一貫性があるように。**保護者が見本になるように**。ただし日ごろから叱る場面や要因を減らしておくことも必要です。ですが危険、他者に危害・迷惑、約束事不履行、うそなどのときは**叱ることが必要**です。子どもに好かれようとして、叱らないと、とんでもない人物に育ってしまいます。叱っていても愛情があることをこどもは理解しているのです。「しつけ」の意味は、その語源が、裁縫での「しつけ」や農耕での「しつけ」にあります。しつけの漢字は、中国由来ではなく和製漢字なのです。「躰」とは、身（精神的なことを含むからだ）を美しくすることです。しつけを互いにし合ひましょう。